

僕のビアンカ (1984)

BIANCA

メディア 映画

ジャンル

製作国 イタリア

色彩 Color

時間 98分

初公開日 1990/01/25

公開情報 ゼアリズ＝新日本映画社

【解説】

モレッティのミケーレ・シリーズ3作目。独特のシニカルな笑いには更に磨きがかかって、結末などちょっと怖いほどだ。マリリン・モンロー校の新任数学教師ミケーレは越してきたアパートの手洗いをアルコールを燃やして消毒後、早速、ご近所の観察。大家のシーロ氏が40歳も年下の愛人とお盛んなのに眉をひそめ、喧嘩ばかりの隣室のカップルに茶々を入れる。彼には自分に関わった人間をファイルにする癖があり、毎日、適当な相手を見繕って脅迫めいた昔話を電話でしては溜飲を下げ、親友夫婦に別れ話が持ち上げればちょくちょく出かけて何とか諫めようとする“お呼びでないヤツ”なのだが、こと恋愛に関しては臆病で、そう図々しくは運べない。やはり新任の仏語教師ビアンカに一目惚れしたものの、彼女の同棲相手の身辺を百科事典販売員に化けて探る有り様だ。しかも遠巻きから眺める彼らの別れ話を親密な睦言と思い込む鈍感さ。生徒の恋愛相談に乗ったはいいが、彼の家にまで上がり込み、親に説教したうえ、他の兄弟のことにも口を出す（傑作なことにケーキの切り方にまでイチャモンをつける）。が、その家の10歳くらいの末っ子に“恋人はいないの？”と混ぜっ返され、急にシュンとしてしまう。そこで意を決した彼は俄然ビアンカにアタック。彼女のハートを射止めるのだが、幸福に慣れていない彼は、将来、彼女から別れを告げられるのを恐れ、自分の殻に閉じこもってしまう。そうこうするうち、身辺で殺人事件が連続し、人の好い刑事に付きまといわれるミケーレだったが……。向かいの一家の毎夕の団らんの光景をうっとり眺め入る主人公に現代人の孤独などという陳腐な表現では追いつかない侘びしさを込める孤高の人モレッティ。アメリカや自国の大衆文化への愛に満ちたアイロニーもいっぱい、笑わせ泣かせる。

【クレジット】

監督	ナンニ・モレッティ	Nanni Moretti
製作	アキレ・マンゾッティ	Achille Manzotti
脚本	ナンニ・モレッティ	Nanni Moretti
	サンドロ・ペトラリア	Sandro Petraglia
撮影	ルチアーノ・トヴォリ	Luciano Tovoli
音楽	フランコ・ピエルサンティ	Franco Piersanti
出演	ナンニ・モレッティ	Nanni Moretti
	ラウラ・モランテ	Laura Morante
	ダリオ・カンタレッリ	Dario Cantarelli